



第145回 病気は敵か、それとも人生の一部か？

現代医学において、病気はしばしば「撲滅すべき敵」や、正常な身体という「機械」に生じた「故障」として捉えられる。しかし、慢性疾患と共に生きる人々や、老いを受け入れつつ穏やかな時間を過ごす人々の姿は、病気が単なる災厄ではなく、人生という物語の不可欠な一部であることを示している。健康を「完全に良好な状態」とする静的な結果としてではなく、ゆらぎ続ける動的なものと捉え直すとき、メルロ＝ポンティとフランクルの哲学は、医療の本質を照らし出す重要な導き手となる。

▼メルロ＝ポンティとフランクルの哲学から

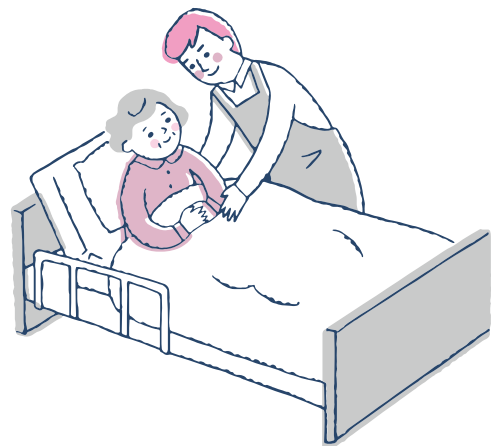
フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティは、フッサールの現象学を継承し、身体を意識の主体として捉え直す独自の「現象学」を展開した。彼は、客観的なデータに還元される身体ではなく、自らが世界を感じ取り行為する主体としての「生きられた身体 (corps propre)」の重要性を説いた。健康なとき、身体は意識の背景に退き透明な存在として機能するが、病いによって痛みや不調が生じると、身体は「前景」へとせり出してくる。このとき、病気は「世界との関わり方の変容」をもたらす。例えば、階段が単なる移動手段から「障壁」へと変わるように、病気は世界そのものの構造を作り変えてしまうのである。

一方、オーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルは、アウシュヴィッツ強制収容所での体験を基に、独自の心理療法「ロゴセラピー（意味による癒やし）」を創始した。彼は、極限の運命の中にあっても、人間は「意味」を見出せると説いた。人生に対して「何が期待できるか」を問うのではなく、「人生が自分に何を期待しているか」を問うべきだという「コペルニクスの転回」を彼は提唱した。たとえ身体が自由が奪われても、その運命に対してどのような態度をとるか

という「最後の自由」すなわち「態度価値」は残されている。病いを受け入れることは敗北ではなく、限られた時間の中で自らの生を主体的に引き受ける尊厳ある選択となり得るのである。

▼人生の物語を共に歩む伴走者

メルロ＝ポンティとフランクルの哲学を交差させるとき、病気は排除すべき「敵」ではなく、自己を深め、人生を照らし直す「鏡」のような存在として浮かび上がる。病気という「予期せぬ一章」を人生の物語にどう編み込み、どのような意味を見出していくか。医療者の真の役割は、患者という一人の人間が自らの物語を紡ぎ直す旅路に寄り添う「伴走者」であることにある。病気を見つめることは、逆説的に「よく生きる」とは何かを問い直す、豊かな生の営みそのもののなのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
准教授

孫 大輔
(そん だいすけ)